

にいくことをする。そのうち、機が熟すると、むかい合っていた雄が、巢入りを誘うように泳ぎだすと、雌は雄の背面後方に、サツと近寄り、尾をピンと上にそらすようにして、こぎざみに体を左右に振りながらついで泳いでいく。このようなジグザグダンス泳ぎを何度かした後、雌は巢の入口に誘いこみ、体を横に倒しながら、頭で巢穴を開けるようにして雌の巢入りを助ける。

雌は、巢から尾を出すようにしてもぐりこみ、雄に尾柄部を突ついてもらって産卵をする。卵を産み終えた雌は、巢から抜け出ていき、卵の世話を雄にまかせる。巢から出ていくのを待っていた雄は、すぐ巢にもぐっていき卵にしたらこを掛けて受精する。

なわばりの中に熟した雌がおれば、二〜三尾を巢に誘って産卵させる。イトヨの卵は、受精後まもなく発生をはじめ。それにともない、卵は多くの酸素を必要になってくる。必要酸素量は、発生の進行とともに増大する。雌はこれに対して、卵に新鮮な水（酸素）を大きな胸びれであおぐようにして送りこむ、いわゆる換水行動（ファンニング・水あおぎ）を行い、卵が酸素不足にならないようにしている。

このような水あおぎ運動で、それによって生ずる後退力と前進力のふらつきを、尾びれなどをバランスよく動かして体をピタリと一点に保持して換水機能を果たしている。

イトヨの卵は、球形で、直径一・五ミリ程度で、卵黄は黄色半透明である。沈性卵で、付着性があり塊となっている。受精卵は硬い。産卵後七日目ほどの卵は、眼球も黒くなって心臓の動きもよくわかり、血液の循環が認められ、胸びれらしきものがみえてくる。

大きな胸びれで水流を送りこむ時間は、卵の成長、発育とともに長くなってくる。卵は水温18度Cで、10日後にふ化するが、そのころからファンニング行動はなくなってくる。

ふ化したばかりのイトヨには、トゲウオらしい棘のひれは、まだでき

ていない。大きな卵黄がめだち、全長五・五ミリくらいである。そのような仔魚は、まだ泳げず巢材に乗るようにして、ときどきピヨンと跳ねるような泳ぎ？をする。卵黄は、ふ化後五日目ほどで吸収され、あごが発達して口が開閉するようになる。

ふ化後七日間ほどは、巢にとどまって雌親に守られてすこす。卵黄がなくなった仔魚は巢のまわりに散らばるが、遠くにはなれそうになると、雌親が追いかけて仔魚を口にふくんできて、巢にパツともどすことをする。

全長13・5ミリメートルで背棘三本がそろうが、体側の鱗板はまだ発生していない。

全長15ミリメートルほどになると、鱗板が頭部に近い背棘一〜二本の下に五枚と、尾びれに近いほうにも三枚発生し、成魚に近い形態をした稚魚となる。やがて30ミリメートルくらいに成長すると、鱗板が連続して33枚〜35枚が出そろってくる。

背棘などは、ひれが変形したもので、ふだんは倒しておくが、なわばりを守る時・争いの時・あくび？の時などは、とげを立てて相手にむかっていく。

育ち方は、水温・生息場所・食物の量などによって大きく変化するが、会津のイトヨ稚魚は、翌年の春までに全長五〜七センチメートルの大きさに成長し、成熟して営巢・産卵をする。

棘をもつイトヨを襲うものには、コサギ・アオサギなどがある。またカワセミが枝にとまって水中をうかがっていることもある。ウグイがイトヨを口にふくんだまま弱々しく泳いでいるのを観察したが、棘が口にささってえさを食べられなくなったのだろう。ゲンゴロウなど甲虫は、イトヨなどの小魚やオタマジャクシ・昆虫を食べる。ヤゴも小魚やオタマジャクシを食べるが、下唇を伸ばしてイトヨも捕食しているものと思う。アメンボが、弱っているイトヨや死んだイトヨに群がって食いつい